

ギリシャ正教の奉神礼について

日大生産工 中西裕一

The Liturgy of Greek Orthodox Church

Deacon Paulos NAKANISHI Yuichi

アトス山メギスティス・ラヴラ修道院における、いわゆる大齋期間における奉神礼の流れと修道士の生活について『三歌齋経』にもとづいて概観する。

まず、『三歌齋経』に包含される奉神礼は大齋期間に先立つ大齋への準備期間(三週間)、大齋期間(六週間)、受難週間、あわせて十週間となり、主要なものは以下のとおりである(カッコ内は二〇〇四年の日付である)。税吏およびファリセイ(パリサイ)の主日(二月一日)、蕩子(放蕩息子)の主日(二月八日)、断肉のスポタ(二月十四日)、断肉の主日(二月十五日)、乾酪週間(二月十六日～二十二日)、乾酪週間の主日(二月二十二日)、大齋第一週間～大齋第五週間(二月二十二日～三月二十八日)、大齋第一主日～大齋第五主日(二月二十九日から三月二十八日までの主日)、大齋第五週間アカフィストのスポタ(三月二十七日)、聖枝週間(三月二十九日～四月四日)、聖枝週間ラザリのスポタ(四月三日)、聖枝主日(四月四日)、聖大月曜日(四月五日)、聖大火曜日(四月六日)、聖大水曜日(四月七日)、聖大木曜日(四月八日)、聖大金曜日(四月九日)、聖大スポタ(四月十日)および復活祭(パスクハ)の早課に先立つ夜半課の次第である。復活祭の喜びを成就させるために正教徒は大齋において復活祭に向けた準備期間にはいる。『三歌齋経』には正教徒の復活祭に向けた齋の特質をあらわす祈りや、キリストの受難を思いおこす祈りなどが凝縮されていて、『三歌齋経』においては、復活祭に向けた痛悔の祈りの深さとその特質をみることができる。ここでは、この祈祷書に基づいた奉神礼が最も忠実におこなわれる修道院に例をみる。

さて、『三歌齋経』に基づいた大齋期間や受難週間の奉神礼は、祈祷の組み立てに独特のものがあるので、それに前だって修道院における平時(五旬祭後から大齋期間にはいる前の期間の、徹夜祷がある祭日を除く日)の祈りについて概観しておこう。なお、祈祷の開始時刻や所要時間については、アトス修道院における夏期の標準的な例をあげている。

(1) 平時の主日や平日の徹夜堂歌(徹夜祷)の無い日

16:00～17:00、第九時課、晩課

17:00～17:30、夕食

17:30～18:30、晩堂課(生神女のアカフィストを含む晩堂小課)

18:30～19:30、パラクリシス(生神女や聖人への轉達祈願の祈り)

その後、自室で自らの祈りの時にはいり、それを終えると就寝する

03:00～08:00、夜半課、早課、第一時課、第三時課、第六時課、金口聖体礼儀

08:30～09:00、朝食(当日が水、金曜日にあたる場合は無し)

その後、労働あるいは自室における祈りの時となる

(2) 平時の主日や祭日など徹夜堂歌(徹夜祷)のある日

16:30～17:00、第九時課、小晩課

17:00～17:30、夕食

17:30～18:30、パラクリシス(生神女や聖人への轉達祈願の祈り)

21:00～03:00、晩堂課(晩堂小課)、大晩課(リティアを含む)、早課(ポリエレイあり)、第一時課(夜半課はおこなわれない)

07:00～09:00、小聖水式、第三時課、第六時課、金口聖体礼儀

09:30～10:00、朝食

その後、労働あるいは自室における祈りの時となる

正教徒は平時でも毎週水(ユダの裏切りの日)、金曜日(キリストの受難の日)は齋の日と決められ、また大齋は凡そ四十日間にわたる節食期間となり、いずれも奉神礼と食事との関わりは深い。例えば、平時の修道院においても奉神礼の流れのなかにあつて、トラペザ(食堂)で食事のできる機会は、晩課を終えたおよそ十六時～十八時頃と、朝の聖体礼儀後のおよそ九～十時頃ということになる。すなわち、修道院においては平時の場合は一日二食以上を摂ることはできない(トラペザが開かず、公式な食事の機会が無いという意味において)。

メガリ・サラコスティ期間の奉神礼

さて、ここで齋の実際について触れておこう。まず、齋とは一定のルールに基づく「禁食」である。正教

会暦によれば、食物は基本的に次の四つのカテゴリーに分けられ、齋が行われる。(1) 肉類、(2) 乾酪類(牛乳、チーズ、バター、卵、動物性の脂肪)、(3) 魚、(4) 油とワインである。平時の「齋の日」である水曜日、金曜日にはこのすべてのカテゴリーの食物を食することが禁じられる。

『三歌齋経』によれば、その内的な意味は以下である。

「我等主に悦ばれ受けらるる齋を守らん、真の齋は乃ち悪事を離れ、舌を慎み、怒りを積み、諸欲を断ち、毀謗(そしり)、詐譎(いつわり)、誓に背くことを除く、此れ真の齋にして受けらるべき者なり。」

さて、食事の回数がどうしても一日一食にならざるを得ない場合をご紹介します。それはメガリ・サラコスティ(大齋)という節食期間である。サラコスティの意義については別に述べたが、復活祭前の四十日間をその準備期間と定めてキリストの受難を象り、それを体験していく。土曜日と主日(日曜日)は少し緩和されるが、平日は、「肉、魚、乾酪類(牛乳、チーズなどの乳製品、卵)、オイル、ワイン(酒)」が禁止される(修道院では肉はどんな場合も一切食べない)。

メニューは後述することにして、ここではなぜ奉神礼の関係で一食になるかを理解していただく。復活祭へ向けてメガリ・サラコスティの期間にはいと奉神礼の流れが平時と大きく変わってしまう。それだけ、正教会の祈りは復活祭に重きをおく。『トリオーデオ(三歌齋経)』という大部の祈祷書があり、メガリ・サラコスティにはいる少し前からこの祈祷書に基づいて奉神礼が進んでいくが、聖歌の調子も重く替わり、キリストの受難の象りが強く意識される。聖堂内も暗く灯りを落とし、司祭の祭服も埋葬を暗示する黒を着用する。そういう時だからこそ節食するのではないかという漠然とした理由からではなく、修道院の生活は、結局は奉神礼に基づいてすべて進められているから、祈祷書に記された奉神礼の次第から、一日一食という生活がきまる。そういう期間を齋期間と呼んでいるのである。

まず、メガリ・サラコスティの期間は、ご聖体すなわち成聖されたパンと葡萄酒をいただく聖体礼儀は毎日行われたい。すなわち、パンと葡萄酒を司祭が聖神(聖霊)を呼んで(エピクレーシス)、キリストの体血に変化させる(「聖変化」の機密と言う)最も大切な祈りによって行われる儀式(「機密」という)が、この期間は土曜日と主日のみになる。

しかし、メガリ・サラコスティの期間は、平日は聖変

化の機密が行えなくなるということだけで、ご聖体をいただくことはできる。直前の主日に、前もって聖変化させておいたご聖体を宝座(祭壇)に安置しておいて、それを平日に食する奉神礼が用意されている。これを「先備聖体礼儀」(問答者グリゴリオの聖体礼儀)と呼んでいる。この先備聖体礼儀は、通常はメガリ・サラコスティ期間の水曜日、金曜日に行われるきまりがあるが、他の曜日でもかまわない(実際に水曜日、金曜日以外に行われるのはその日が聖人などの祭日の場合)。

しかし、この先備聖体礼儀は聖変化のある平時の聖体礼儀(通常は「クリュソストモス聖体礼儀」)の位置づけとは異なっている。平時に行われるクリュソストモス聖体礼儀は、朝の奉神礼の中に位置づけられていて、夜半課、早課、一時課、三時課、六時課を祈った後、午前中に必ず行われるしくみになっているが、先備聖体礼儀は、必ず晩課に次いで行われるようなしくみになっている。すなわち、夜半課、早課、一時課、三時課、六時課、そして九時課、晩課、先備聖体礼儀の流れとなる。晩課に次いで行われるので、どうしても午後にならざるをえない(晩課は午前中には行えない)。

メガリ・サラコスティ(大齋)期間中の奉神礼

03:00 シマンドロ

夜半課

早課

一時課

07:00 終了

自室に戻り休息(まだ聖体礼儀が終わっていないので食事はできない)

11:00 シマンドロ

三時課

六時課

九時課

晩課と先備聖体礼儀

14:00 昼食

16:00 シマンドロ

晩堂課(この祈りを終えると、翌日の聖体礼儀後まで食事はできない)

20:00-21:00頃に就寝

トラペザにはいり食事をすることができるのは、基本的には修道院では聖体礼儀の後と、晩課の後であり、かつ晩堂課(食後の祈り)の前でなければならない。しかしメガリ・サラコスティ期間の平日は、

聖体礼儀が晩課の後で行われるので、通常の流れが逆転してしまう。これで、食事の機会を一回失うこととなる。それでは、晩課を一度終えて食事をしてから、少し時間をおいて、先備聖体礼儀をやっ
て食事をすればいいのではないかと思われるかも知れないが、先備聖体礼儀は晩課と一体となった切り離せない構造になっている奉神礼なので、そういうことも不可能である。

そうすると、まず早朝から朝の祈りの区分になる夜半課、早課、一時課が行われる。ここで一度解散し、再び集まって、三時課、六時課、九時課、晩課、先備聖体礼儀、そして食事となる。晩課は文字通り暮れの祈りで、午前中に行わないので、先備聖体礼儀が済むのは、どうしても午後になってしまう。通常は、先備聖体礼儀が十三時頃に終わり、やっとその日の初めての食事ができるが、ほっとしていると晩堂課の始まる十六時頃がもうせまってくる。晩堂課を終えてしまうと先に述べたとおり、次の日の聖体礼儀まで食事はできない。かくして、メガリ・サラコスティ期間中の平日のトラペザの扉は奉神礼の関係で、概ね十三時頃に一度しか開くことがないのである。

聖体礼儀前には食事はできないのでそれまで待っていると、晩課も同時に終わってしまうので、食事の機会を一回カットしたかたちになる。これで聖変化のある聖体礼儀が行われる土曜日、主日以外は、メガリ・サラコスティ期間は一日一食しかとれなくなる。かつ、肉、魚、乾酪類(牛乳、チーズなどの乳製品、卵)、油、葡萄酒(酒)は食卓には決して上らない。

それでは、先備聖体礼儀の無い曜日(月、火、木)は二食が可能ではないかと思われるかも知れないが、これも食事は一食に限られる。なぜなら、先備聖体礼儀の無い日は、九時課の終わる部分から「聖体礼儀代式(ティピカ)」という「聖体礼儀に代わる祈祷」が組み込まれていて、それが晩課の終わりで同時に終了するような構造になっている。この「聖体礼儀代式(ティピカ)」が終わってから食事ということになるが、その時もやはり晩課も終わっている、事態はまったく同じである。

結局はメガリ・サラコスティの平日は、晩課の前に聖体礼儀をおこなうことができないので、通常の朝の聖体礼儀後の食事はカットされると考えればよい。同じようなかたちでサラコスティをしなければならない日は、降誕祭(クリスマス)の前日、そして主の洗礼祭(神現祭)の前日などである。いずれの日も、

晩課の後に聖体礼儀が置かれているので、やはり一日一食となってしまふ。つまりクリスマスイヴは、ほんとはまだ節食期間なのである。

クリスマス降誕祭の場合は、前日の14時頃に晩課に次いで聖体礼儀が終わって、そのあとおかゆを食べる。そして、二十一時頃から始まる晩堂課を待つ。そして、晩堂課、早課、一時課を徹夜で祈ると未明の三〜四時頃になり、そこで一旦休みをとって、朝七時頃から三時課、六時課、聖体礼儀をおこない、九時頃にはトラペザにはいり、そこでようやくクリスマスのご馳走のテーブルにつくことになるのである。前日はサラコスティで、おかゆ一食だけだったので、トラペザは喜びに満たされていて、そのおいしさはまた格別に感じるというわけである。

カリ・サラコスティ(よき齋を) — 「喜び」と「励まし」 —

修道院における生活は、様々な面で世俗の生活と比べたら比較にならないほど厳しいものであるとも言える。しかし、それは世俗に暮らすわれわれから見た物差しによるにすぎない。あえて言うならば、むしろ修道士たちは「喜び」とともに生きていってよい。規則もあるけれどそれは決して杓子定規ではなく、たとえ規則に背いたとしても修道士への形式的な罰則など人が課したとて、そのこと自体に何も意味がない。かといって勝手な生活をしているかと言えばそんなこともない。私がこの修道院にはいって確認を求められた規則は、修道院から外出するとき、修道院長に直接に会って「外出許可をとること」それだけだった。もちろん聖堂やトラペザでは会話をしてはならないことにはなっているが、まったく駄目ということでもなかった。

例えば、パスハを迎える40日前からメガリ・サラコスティ(大齋)という節食期間にはいる。修道院ではこれが厳しく守られる。例えばサラコスティの期間にはいった最初の週の月曜日から水曜日の昼過ぎにおこなわれる奉神礼があるまでは絶食となる(トラペザは開かないということ)。例えば、この期間の朝、宿坊の廊下で会った親しい長老修道士が「ねえ、パーテル・パヴロス、気分はどうだい、サラコスティだね、とても清らかな気持ちだねえ」と静かな笑顔で私に朝のことばをかけてくれたあの穏やかな表情が強く印象に残っている。この一言が、その後のサラコスティの期間全体にいわば光彩を放ったかのように及び、私も空腹を通り越してなんだか体全

体が軽くなり、飽食の気怠さなどは遙かかなた世界の
ことのように思うに至った。

正教の信仰生活にとって、主イエス・キリストの復活を祝う
パスハ(復活祭)は最大の祭りである。また、毎週日曜日を「主日
(キリアキー)」と呼んで、主の復活を象る日としている。

パスハを迎えることは正教徒の信仰生活にとってかけがえのない
出来事であることから、その喜びにあずかるべき神にふさわしい
自分にならねばならない。正教徒はそのためにパスハをめざして、
40日間の齋(サラコスティ・食を節する期間)を過ごすのだ。

そこには暗さはなく、ただあこがれの目標たる神をめざす集中力の
アップ、それに伴う清らかな気持ちがある。そしてそういう生活を
あこがれ、求めて、この世界はいることができた人たちばかりなの
である。